

日常記憶における気分の影響とその調整

——発達の視点からの検討——

富山尚子*

The Process of Mood Regulation and Mood Effects on Memory :

The Perspective of Age Differences

TOMIYAMA Naoko

abstract

This article examined how age differences among the participants influenced the mood effects on recall. Short animated cartoons were shown to 72 third-grade children and 66 undergraduates to induce positive or negative mood. Participants were asked to recall the recent events about themselves (self-referent retrieving) or their friends (other-referent retrieving). The results revealed that the third-grade children showed the same mood effects and the same possibility of mood regulation as the adults. However, it is considered that the context for mood regulation was more restricted for the children than for the adults. It is suggested that sufficient experience is necessary to regulate negative mood, and children generally have undergone fewer experiences than adults have.

Keywords : mood effects, other-referent retrieving, mood regulation, age differences

問 題

ひとは誰もが、気分のよいときに他人にやさしくなったり、楽しいときに明るい色の洋服を選んだり、落ち込んだときに悲しかった出来事を思い出したり、気分の悪いときに他人への評価が厳しくなったり、といったことを経験したことがあるのではないだろうか。このような、感情と認知活動の関連については、様々な科学的な研究が行われており、現在では、感情と認知の間に関連があるという単純な関係の確認にとどまらず、ある感情が生じたときに、どの認知過程にどのような影響があるのかという、それぞれの関係を相互的に捉えていこうという観点からの研究が進められている。そして、知覚や記憶、社会的判断などの情報処理過程を取り上げて、認知と感情の関連を解明しようという試みが続けられている。

気分の効果とその調整

これまでの研究の中で、感情の認知過程への影響として見いだされた効果のひとつに、気分一致効果がある。これは、情報の処理時の気分に一致する感情価を持った情報が処理されやすいという現象で、たとえば、うれしい時にはポジティブな情報が学習、再生されやすいとされる (Blaney, 1986; Bower, 1981; Bower, Gilligan, &

キーワード：気分の効果、他者関連的再生、気分の調整、年齢差

*平成6年度生 人間発達学専攻

Monteiro, 1981; Forgas & Bower, 1987; 川瀬, 1992)。気分一致効果は、認知と気分の関連についての研究、特に記憶に関する研究では、しばしば取り上げられ、観察される効果であり、気分の基本的な効果であると考えられている。しかし、研究が進むにつれて、ポジティブな気分では気分一致効果がみられやすいがネガティブな気分では必ずしもみられないという、ポジティブな気分とネガティブな気分の効果の非対称性の問題 (Blaney, 1986; Bower, 1981; Forgas, Burnham, & Trimboli, 1988; 1992; 池上, 1996, 1997, 1998; 富山, 1995) や、自己に関連する情報処理を行う (たとえば記憶材料を自己に関連するかどうかの判断をする) ような場合には、ネガティブな気分でも気分一致効果がみられやすいという、自己関連性の問題 (Derry & Kuiper, 1981; 伊藤, 2000; 川瀬, 1996; Kuiper & Derry, 1982; Nasby, 1994, 1996; 筒井, 1997a), などが指摘されるようになってきた。また、ネガティブな気分の場合に、気分と一致しないものの方がより記憶・再生されるという、気分不一致効果もいくつかの研究で指摘されている (Blaney, 1986; McFarland & Buehler, 1998; Parrott & Sabini, 1990; 富山, 1995, 1997)。

ネガティブな気分では一致効果がみられない、あるいは不一致効果がみられるといった、非対称性の問題の解釈として、いくつかの解釈が試みられてきているが、それらのほとんどに共通している考え方は、気分によって何らかの情報処理が選択される、ネガティブな気分は調整されることがあるという考え方である。そして、気分の調整が働く条件としては、気分を維持・調整しようとする動機 (Clark & Isen, 1982; Isen, 1984, 1987; Parrot & Sabini, 1990; Rusting, 1998) や、社会的な要因 (Forgas & Bower, 1987) が指摘されている。

たとえば、Clark & Isen (1982) は、気分を維持調整するための情報処理方略の選択過程を仮定し、ネガティブな感情状態を緩和するように調整することが可能であるとしている。この仮定に従えば、ネガティブな気分になっても、ネガティブな気分のままでよいと判断される状況であれば、気分を維持する情報処理を行うし、ネガティブな気分のままでは嫌だと判断される状況であれば、気分を調整する情報処理を行うと考えることができ、気分の非対称性の結果を説明することができる。

一方、一般にひとは社会的に望ましい行動を取るべきであるという社会的な規範にあわせようということから、他者についてのネガティブな反応は好ましくないので避けようとすると考えられ、ネガティブな気分の影響の調整が働く条件となると考えられる (Forgas & Bower, 1987)。

Forgas, Bower, & Krantz (1984) の研究では、催眠法によって気分を操作し、事前に撮影した被験者と他者の2人の会話場面の行動の知覚について検討した結果、被験者自身の行動については、ポジティブな気分では好ましい行動が知覚されやすく、ネガティブな気分では好ましくない行動が知覚されやすいという気分と一致する効果がみられた一方で、他者の行動については、ポジティブな気分では気分と一致する知覚がみられたが、ネガティブな気分では気分と一致する知覚はみられなかった。また、筒井 (1997b) は、音楽による気分の操作を行い、ポジティブ (ネガティブ) な特性語について自己関連判断する (自分にあてはまるか否かを判断する) 場合と、他者関連判断する (母親にあてはまるか否かを判断する) 場合の再生について検討し、自己関連判断する場合は、ポジティブな気分およびネガティブな気分でも気分一致効果がみられたのに対して、他者関連判断する場合は、ポジティブな気分では気分一致効果がみられたが、ネガティブな気分では気分と一致する効果はみられないという結果を示している。このような他者に関する反応についての研究は、気分の効果の非対称性の問題の解釈を提供すると同時に、自己に関連する情報処理を行う場合には、ネガティブな気分でも気分一致効果がみられやすいという自己関連性の問題とも関わっている。

発達の視点の必要性

これまで気分の効果について行われてきた研究の大半は大人を被験者としており、子どもに関する研究は非常に少ない (Bartlett, Burlison, & Santrock, 1982; Bartlett & Santrock, 1979; Forgas et al., 1988; Hammen & Zupan, 1984; Masters, Barden, & Ford, 1979; Nasby & Yando, 1982)。そして、気分の維持もしくは調整のための情報処理方略の選択過程や、気分の調整に関連する複雑な要因の問題も、大人を対象とした研究が進められている。しかし、気分の調整の問題に関して発達の問題による解釈を示している研究もある。たとえば、Clark & Isen (1982) は、大人ではポジティブな感情状態を維持したり、ネガティブな感情状態を緩和したりするように調整することが可能であるが、子どもではその方法がまだ十分に発達しておらず、この調整は年齢とともに可

能になると述べている。

また、Forgas et al. (1988) は、8才から10才の子どもの対象に、ビデオを見せることで学習時の気分を操作し、他者についての短文を学習させ、再生時に手がかりとして他者名を与えるという手続きを用いて、記憶と気分の効果について調べている。その結果、ネガティブな情報についてはネガティブな気分の場合よりもポジティブな気分の場合により多く再生され、ポジティブな情報については、気分の差はみられなかった。つまり、どちらの気分でも気分と一致する効果はみられていない。同様の手続きを用いた大人を対象とする研究 (Forgas & Bower, 1987) では、気分一致効果がみられており、大人と子どもで異なる結果となっている。大人と子どもで異なる結果となったことについて、Forgasらは、子どもには大人にはほとんどみられない、“他者についてのポジティブな情報よりもネガティブな情報をより記憶する”というネガティビティ・バイアスがあるという考えを示し、子どもにおいては感情の社会化が弱くネガティブなバイアスの抑制（他者についてのネガティブな反応は好ましくないで避けようとする）が欠如していることを反映しているかもしれないとしている。しかし、ネガティビティ・バイアスだけでは、なぜネガティブな情報の再生が、ネガティブな気分よりもポジティブな気分で多かったのか、つまり、なぜ一致効果がみられなかったのかについては、解釈することはできない。Forgasらは気分の調整については考慮しておらず、他の子どもについての研究でも気分の調整の視点は取り上げられていない。

そこで、富山 (1995) では、小学校3年生を対象に、ビデオによる気分の操作を行い、文形式の記憶材料の学習・再生課題を用いて、子どものネガティビティ・バイアスの存在および、気分の調整の可能性について検討した。その結果、ネガティビティ・バイアスの働きがあるにもかかわらず、[人+人]条件（他者名を主語とする文を記憶材料として学習し、他者名を手がかりとして再生する場合）では、ネガティブな気分で有意に一致しない効果がみられ、再生時の他者関連的処理が、気分の調整要因として考えられた。このことから、条件によっては、子どもでも大人でみられるようなネガティブな気分の調整を行う、という可能性が示唆された。

本研究の目的

気分の効果についての研究では、大人と子どもの差について注目されることは少ないが、こういった両者の間で結果が異なることを示唆する研究があることから、発達の見地から検討すべき多くの問題が残されていると考えられる。

富山 (1995) では、被験者は子どものみで、同じ条件による大人との比較は行っていない。しかし、実際に大人と子どもで気分の調整を行う条件が異なるのかどうかについて検討するためには、大人と子どもの結果を比較する必要がある。また、気分の調整が行われる要因について検討するために、自己と他者に関する反応を比較することは、気分の効果の非対称性の問題と自己関連性の問題の両方を含めていることから、適切であると考えられるが、富山 (1995) では、再生時の他者関連的処理のみを扱っており、自己関連的処理については検討されていない。

そこで、本研究では、被験者としての子どもに注目し、気分の調整要因として再生時の自己（他者）関連性を考慮して、大人との比較を行い、気分の効果について、気分の調整の視点からの考察を加えることを目的とする。

大人と子どもの結果を比較するためには、両方に同じ条件で行える課題を使用する必要がある。そのためには、気分の操作や再生課題としては、簡潔で、認知的な負荷が少ないものが望ましい。そこで、本研究では、富山 (1995) と同様に、ビデオによる気分の操作を行う。また、再生課題としては、日常記憶（経験した出来事の記憶）の再生課題を用いる。日常記憶の再生課題は、学習・再生課題と違って、学習段階がないため認知的負荷が比較的少なく、再生時の要因の影響を直接的に判断できる課題であると考えられるため、今回の課題としては適切であると考えられる。

ところで、富山 (1999) は、大人を対象として、ビデオによる気分の操作を行い、“文を書く”という認知活動に対する気分の影響について検討した。その結果、ネガティブな気分で、自分を対象に文を作成する条件（自己関連的処理）で、気分と一致した内容の文の作成から一致しない内容の文の作成へという、気分の影響の時系列的な変化が確認された。対象とする認知活動は異なるが、このような時系列的な変化が、日常記憶の再生でも見られる可能性も大いに考えられる。そこで、この点についても、検討を加えることが必要であると考えられる。

以上のことから、本研究では、ビデオによる気分の操作を行い、日常記憶の再生課題を用いて再生時の自己（他者）関連要因を操作し、大人と子どもの結果を比較し、実際に子どもと大人では、気分の影響が異なるのかどうかについて検討していく。また、再生順にも注目して、再生時の気分の影響の時系列的な変化の可能性についても検討を加えていく。

本研究における仮説は、次の通りである。大人がネガティブな気分の調整を行うと予想される状況では子どもも同様に気分の調整を行い、大人と子どもで気分の効果に差はみられない、すなわち (a) ポジティブな気分の場合、一貫して気分と一致した出来事の再生がみられ、(b) ネガティブな気分の場合、再生時に自己関連の処理をさせる条件（自分に関連する出来事の再生）では、気分と一致した出来事の再生から一致しない出来事の再生へと、気分の影響に時系列的な変化がみられる。一方 (c) ネガティブな気分で、再生時に他者関連の処理をさせる条件（他者に関連する出来事の再生）では、最初から気分と一致しない再生がみられる、と予想される。

方法

実験計画

年齢（児童／大学生）×気分3（ポジティブ／ネガティブ／統制）×再生対象2（自分／他者）×再生順序3（1番目－3番目）の4要因計画とした。なお、第1要因、第2要因、第3要因は被験者間要因、第4要因は被験者内要因とした。

被験者

児童の被験者は、東京都江戸川区の公立小学校に在籍する小学3年生72名（年齢範囲8歳2か月～9歳1か月；平均年齢8歳8か月）で、質問紙による集団調査を行った。気分別の3群×再生対象2の6群を設定し、気分はクラスごとに振り分け、男女それぞれ12名ずつが各群にあてはまるようにした。なお、実験は、3クラス81名について行ったが、3つの日常記憶すべてについて回答している被験者のみを今回の分析対象とした。大学生の被験者は、東京都内の女子大学生66名（年齢範囲19歳1か月～21歳4か月；平均年齢20歳1か月）で、5人もしくは6人のグループごとに質問紙による集団調査を行った。気分別の3群×再生対象2の6群を設定し、各群に11名ずつをランダムに割り振った。

気分の操作

富山（1995, 1999）と同様に、ビデオを用いて気分の操作を行った。使用したビデオは、ポジティブな気分の群はディズニー映画“ダンボ”，ネガティブな気分の群は日本のアニメーション“火垂るの墓”であった。それぞれのビデオは、約5分の長さであった。統制群には、ビデオによる操作は行わなかった。

気分の評定

ビデオによる気分の操作後に、気分の評定を行った。被験者に“いまのあなたの気分にあてはまる場所に丸をつけてください”という指示を用いて、5段階尺度（とても悲しい（1）～とても楽しい（5））で評定させた。

再生対象

日常記憶（出来事の記憶）の再生時に行わせる処理として、自分に関連する出来事の再生（再生対象＝自分条件）と、他者に関連する出来事の再生（再生対象＝他者条件）の2種類を設定した。児童への質問紙では、“あなたに（あなたのお友だちに）、きのうとか、おとといとか、その前とかに、起こったことについて思いついた順番に3つ書いてください。”という指示を、大学生への質問紙では、“心に浮かんだあなたと（あなたの知り合いの誰かと）関連している過去の出来事について、思いついた順番に3つ書いてください。”という指示を用紙に記入した。

手続き

(1) ビデオ課題による操作によって、気分を生起させた（約5分間）。

- (2) 現在の気分を、5段階尺度で評定させた(約1分間)。
- (3) 上部に指示が書かれ、その下に等間隔に1～3までの番号が縦に書かれているA4版の用紙を被験者に提示し、日常記憶を再生させた。再生に要した時間は、被験者によって多少異なるが、平均して児童で約10分間、大学生で約8分間であった。質問のある場合は、手を挙げるように求め、個別に対応した。
- (4) 全員が書き終わったことを確認した後に、再生された3つの日常記憶について、児童の場合は、“書いてくれたことは、(全然楽しくないことでしたか(1)・あまり楽しくないことでしたか(2)・ふつうでしたか(3)・ちょっと楽しいことでしたか(4)・とても楽しいことでしたか(5))、あてはまるところに丸をつけてください”という教示を用いて、記述された3つの内容についてそれぞれ、被験者自身の評定を求めた。大学生の場合は、“書いてくださった内容について、5段階(非常にネガティブである(1)～非常にポジティブである(5))で、評定してみてください”という教示を用いて、同様に被験者自身の評定を求めた。
- (5) 実験後は、特に児童の場合は、時間をとって“今一番好きなことや楽しいことは何ですか?”という質問をし、特にネガティブな気分が残らないように注意した。

結果と考察

気分の生起

Table1は、それぞれの気分評定値の平均と標準偏差を条件別に示したものである。

Table1 条件ごとの気分評定値の平均(max=5)(標準偏差)

生起した気分	再生対象=自分条件	再生対象=他者条件
被験者=児童		
ポジティブ群	4.2 (0.8)	4.0 (1.0)
ネガティブ群	2.5 (0.8)	2.5 (0.7)
統制群	3.0 (0.6)	3.2 (0.5)
被験者=大学生		
ポジティブ群	4.2 (0.4)	4.1 (0.3)
ネガティブ群	2.8 (1.1)	2.9 (0.5)
統制群	3.0 (0.5)	3.1 (0.3)

実際に被験者の気分が予想された通りに生起したかどうかを確認するために、気分の評定値について、年齢×気分×再生対象の3要因の分散分析を行った。その結果、気分の主効果のみが有意であり($F(2, 126) = 53.3, p < .0001$)、年齢および再生対象と関連する効果はみられなかった。さらに気分の効果について多重比較を行った結果、ポジティブ群と統制群、ポジティブ群とネガティブ群、統制群とネガティブ群のそれぞれの間に有意な差がみられた。

これらの結果から、課題によって生起すると期待された気分が、実際に生起したと考えられ、本研究で使用した気分生起の課題は適切であったと考えられる。

出来事の再生

全体的分析 各条件における再生された出来事のポジティブ度の平均および標準偏差は、Table2に示す通りである。

ポジティブ度について、年齢×気分×再生対象×再生順の4要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果($F(1, 252) = 33.7, p < .0001$)、気分の主効果($F(2, 252) = 13.1, p < .0001$)、再生順の主効果($F(2, 252) = 3.6, p < .05$)、

年齢×再生順の交互作用 ($F(2, 252) = 3.6, p < .05$) が有意であった。

Table2 条件ごとの再生のポジティブ度の平均 (max=5) (標準偏差)

再生対象	被験者	再生順		
		1 番目	2 番目	3 番目
再生対象 = 自分条件				
児童	ポジティブ群	4.8 (0.6)	5.0 (0.0)	4.9 (0.3)
	ネガティブ群	3.4 (1.9)	3.2 (1.7)	3.5 (2.0)
	統制群	4.5 (0.8)	4.4 (0.9)	4.4 (0.9)
大学生	ポジティブ群	4.7 (0.5)	4.0 (0.9)	3.7 (1.0)
	ネガティブ群	2.9 (1.3)	3.5 (1.6)	3.8 (0.9)
	統制群	4.3 (0.5)	3.2 (1.0)	2.6 (1.3)
再生対象 = 他者条件				
児童	ポジティブ群	4.8 (0.6)	4.8 (0.6)	5.0 (0.0)
	ネガティブ群	4.5 (0.7)	4.8 (0.6)	4.4 (1.1)
	統制群	4.4 (1.2)	4.1 (1.3)	4.2 (1.6)
大学生	ポジティブ群	4.5 (0.7)	3.9 (1.1)	3.6 (0.8)
	ネガティブ群	3.7 (1.2)	3.3 (1.0)	3.0 (1.2)
	統制群	3.1 (0.7)	3.8 (0.9)	3.1 (1.2)

さらに、気分×再生対象×再生順の2次の交互作用 ($F(4, 252) = 3.1, p < .05$)、および年齢×気分×再生対象×再生順の3次の交互作用 ($F(4, 252) = 4.0, p < .01$) も有意であった。3次の交互作用に有意な差がみられたため、下位分析として再生対象ごとの分析を行った。

再生対象=自分条件 Figure1は児童について、Figure2は大学生について、再生順に、自分に関連する出来事を再生した場合の、気分ごとのポジティブ度の平均評定値を示したものである。

ポジティブ度について、年齢×気分×再生順についての3要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果 ($F(1, 126) = 7.2, p < .01$)、気分的主効果 ($F(2, 126) = 8.9, p < .001$)、気分×再生順の交互作用 ($F(4, 126) = 4.7, p < .01$)、および年齢×気分×再生順の2次の交互作用 ($F(4, 126) = 4.3, p < .01$) が有意であった。そこでさらに、2次の交互作用の下位分析として、年齢別に気分×再生順の効果について分析を行った。

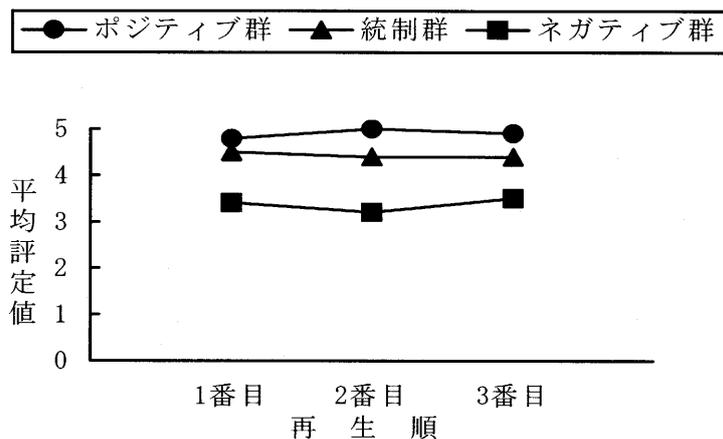


Figure1 児童における再生順ごとの各気分の平均評定値：再生対象=自分条件

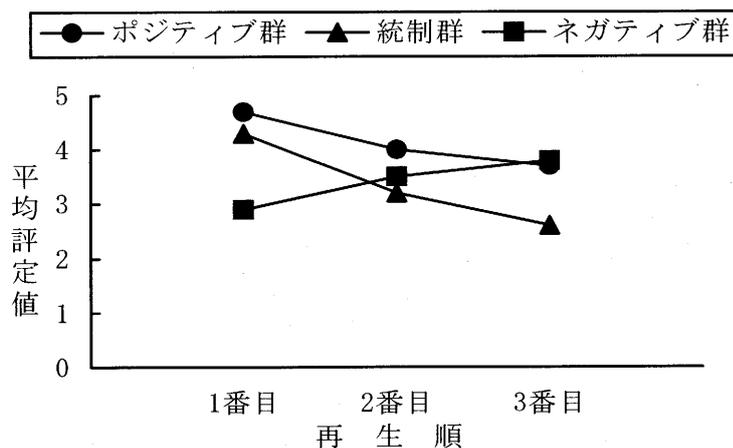


Figure2 大学生における再生順ごとの各気分の平均評定値：再生対象＝自分条件

その結果、児童の被験者の場合は、気分の主効果 ($F(2, 66) = 6.1, p < .01$) のみが有意であり、多重比較の結果、ポジティブな気分の群とネガティブな気分の群の間 (P 気分 > N 気分)、および統制群とネガティブな気分の群の間 (統制群 > N 気分) に差がみられた。

一方、大学生の被験者の場合は、気分の主効果 ($F(2, 60) = 4.9, p < .05$)、および気分×再生順の交互作用 ($F(4, 60) = 5.2, p < .01$) に有意な差がみられた。再生順ごとに気分の効果について検定してみると、1番目の再生では、気分の効果に有意差がみられ ($F(2, 30) = 13.9, p < .0001$)、多重比較の結果、ポジティブな気分の群とネガティブな気分の群の間 (P 気分 > N 気分)、および統制群とネガティブな気分の群の間 (統制群 > N 気分) に差がみられた。2番目の再生では気分の効果には差はみられなかった。3番目の再生でも、気分の効果に差がみられた ($F(4, 60) = 4.2, p < .05$) が、多重比較の結果は、1番目とは異なり、ポジティブな気分の群と統制群の間 (P 気分 > 統制群)、およびネガティブな気分の群と統制群の間 (N 気分 > 統制群) に差がみられた。

以上の検定の結果から、再生対象が自分である条件では、気分の影響に年齢による差がみられ、ネガティブな気分では、児童 (小学3年生) では一貫してネガティブな気分と一致する内容の再生がみられた。大学生では、1番目の再生はネガティブな気分と一致する内容の再生であったが、2番目以降は気分と一致する内容の再生はみられず、3番目の再生では、気分と不一致な内容の再生がみられた。従って、(b) ネガティブな気分の場合は、自分に関連する出来事の再生では、気分と一致した出来事の再生から一致しない出来事の再生へと気分の影響に時系列的な変化がみられる、という予想は、大学生では確認されたが、児童 (小学3年生) では支持されなかった。一方、ポジティブな気分の場合は、児童では統制群との差はみられなかったが、非常にポジティブ度の高い内容の再生がみられ、大学生でも統制群よりもポジティブな内容の再生がみられたことから、年齢に関係なく、(a) ポジティブな気分の場合は、一貫して気分と一致した出来事の再生がみられるという予想は、自分条件で支持されたと考えられた。

再生対象＝他者条件 Figure3は児童について、Figure4は大学生について、再生順に、他者に関連する出来事を再生した場合の、気分ごとのポジティブ度の平均評定値を示したものである。

ポジティブ度について、年齢×気分×再生順についての3要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果 ($F(1, 126) = 39.8, p < .0001$)、および気分の主効果 ($F(2, 126) = 6.0, p < .01$) が有意であったが、再生順の主効果およびすべての交互作用は有意ではなかった。さらに気分の効果について、多重比較を行った結果、ポジティブな気分の群と統制群の間に差がみられた (P 気分 > 統制群)。全体的な再生内容のポジティブ度は、大学生よりも児童 (小学3年生) の方が高かった。

検定の結果、年齢に関わらずネガティブな気分の群で、他の群と比べて気分と一致するネガティブな出来事の再生がみられなかった。従って、(c) ネガティブな気分では、他者に関連する出来事の再生では、最初から気分と一致しない再生がみられる、という予想は、大学生および児童のどちらにおいても支持された。また、統制群と

比較して有意にポジティブな内容が再生されているため、(a) ポジティブな気分の場合、一貫して気分と一致した出来事の再生がみられるという予想も、他者条件において大学生および児童のどちらにおいても支持された。

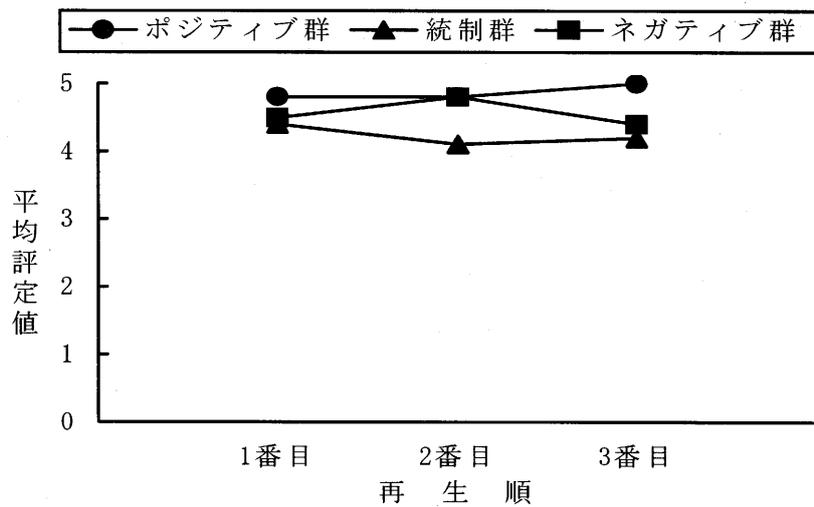


Figure3 児童における再生順ごとの各気分の平均評定値：再生対象＝他者条件

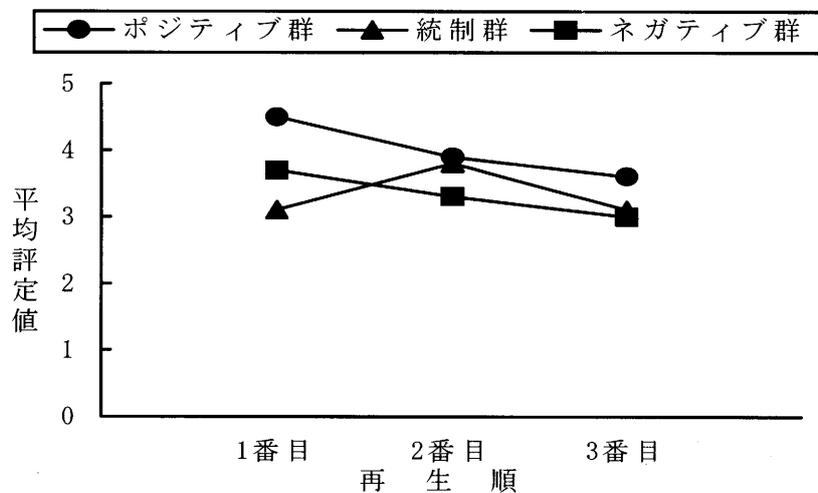


Figure4 大学生における再生順ごとの各気分の平均評定値：再生対象＝他者条件

ま と め

本研究では、ビデオによる気分の操作を行い、気分の効果について、日常記憶の再生課題を用いて大学生と児童（小学3年生）の結果についての比較を行った。

その結果、ポジティブな気分では、児童および大学生のどちらの被験者でも再生対象にかかわらず、最初から気分と一致するポジティブ度の高い再生がみられ、年齢による差はみられなかった。一方、ネガティブな気分では、自分に関連する出来事の再生で、ネガティブな気分の影響に年齢による違いがみられた。児童では、気分と一致する内容の再生がみられ、大学生では、最初はネガティブな気分と一致する内容の再生を行うが、次第に気分と一致しない内容の再生が行われるようになり、気分の効果に時系列的な変化がみられた。しかし、他者に関連する出来事の再生では、ネガティブな気分の影響に年齢による差はみられず、児童でも大学生でも最初から気分と一致しない内容の再生がみられた。つまり、今回の対象となった年齢（8歳2か月～9歳1か月）の子どもでは、

ネガティブな気分の場合に、他者に関連する日常記憶を思い出す条件では、大人と同様に気分の調整を行っている可能性が示された。

では、ネガティブな気分で、再生対象によっては大学生と児童（小学3年生）で異なる影響がみられたことについて、どのような解釈が可能であろうか。Clark & Isen (1982) は、幼い子どもでは、ネガティブな状態を解消したり、ポジティブな状態を維持したりする方略を発達させる機会に乏しいため、その時の気分と一致する認知行動を行うのではないかとしている。また、社会的情報処理のモデルでは、子どもは生物学的に限られた能力と過去の経験の記憶のデータベースを持って、様々な社会的状況に立ち向かっているとして、子どもの能力や経験が発達するものであることを示している (Crick & Dodge, 1994; Lemerise & Arsenio, 2000)。言い換えれば、たとえば悲しいときに楽しいことを考えれば悲しみが薄れるといった、メタ認知的知識が、社会的な情報処理の基礎となっており、メタ認知的知識は年齢発達につれて獲得される (中澤, 2000)。つまり、自分の気分うまく対処するためには、様々な経験が必要であり、本研究で対象とした年齢 (8歳2か月～9歳1か月) では、大学生に比べると経験の量がまだ十分ではないため、気分の調整の方略を選択する状況がより限られていたのではないかと考えられる。たとえば、大学生では、自分の否定的側面を考えないようにすることが気分の調整には有効であるという経験があるので、自分に関連する出来事の再生を行う際に、時間の経過と共に気分の調整が選択されたが、児童ではそのような経験が乏しかったため、気分の調整が選択されなかったと考えることができる。

一方、他者に関連する出来事の再生を行う際には、年齢による差は認められなかった。この状況では、児童の場合も大人と同様に、他者のことについてあまりネガティブなことを思い出さないという社会的に望ましい方向への適応の要因が働いて、気分の調整が行われたと解釈することができ、富山 (1995) でみられた、状況によっては児童でも気分の調整を行うことができるという可能性は、本研究の結果からも認められた。

ただし、富山 (1995) でみられたような、子どもが“他者についてのポジティブな情報よりもネガティブな情報をより記憶する”というネガティブ・バイアスは、日常記憶の再生を課題とした本研究では認められず、むしろ、大人の被験者よりも全体的にポジティブ度の高い内容の再生がみられた。Forgas et al. (1988) は、この年齢の子どもは、“社会性の発達が未熟である”ため、他者情報についてのネガティブ・バイアスを持っていると解釈したが、本研究の結果からは、より日常的な他者についての出来事の再生課題では、ネガティブ・バイアスがみられなかったため、社会性の発達が未熟であるという解釈だけではなく、人工的な記憶実験状況であったこと (課題の特異性) など、他の要因の影響も考慮する必要があるのではないかと考えられる。

本研究の結果から、気分の調整は、年齢の発達につれて社会的経験が増加し、知識が増えることによって、適用される範囲が広がると考えられ、その意味では、気分の調整能力は発達するものであると考えられる。残念ながら本研究では、非常に限られた年齢の被験者についての結果しか、得られていないが、状況によってはこの年齢の子どもでも気分を調整している可能性が示されたことは、非常に新しい視点であり、今後、気分の研究を進めていく上で、子どもを対象にした研究が重要であることを示すことができたと考える。より詳細な知見を得るためには、幅広い年齢を対象にした研究がなされるべきであろう。

また、富山 (2002) では、イメージ法による気分の操作を行い、自分自身がネガティブな状態におかれることを想像する場合の方が、他者がネガティブな状態におかれることを想像する場合よりも、その時に生じたネガティブな気分はより調整されやすく、その後の記憶過程に与える影響も異なることが示唆されている。このような気分の操作時の要因についても、発達の観点からの検討が必要である。ただし、気分の操作については、子どもを被験者とする場合、大人を被験者とする以上に、注意すべき点があると思われる。それはネガティブな気分を誘導した後に、その気分が残らないように配慮することである。大人の実験の場合、偽の成績のフィードバックを行って、気分を生起させる方法がとられることも多いが、子どもを対象にした研究では好ましい方法とはいえない。イメージ法も、その子どもの個人的な体験などを刺激しないように注意する必要がある。

子どもを対象にする研究の実施には、大人を対象とする研究よりも、困難な点が多いと思われ、これが子どもを対象とする研究が進まない理由のひとつであると考えられるが、研究方法のさらなる工夫によって、子どもについての研究が進むことが強く望まれる。

引用文献

- Bartlett, J. C., Bursell, G., & Santrock, J. W. (1982). Emotional mood and memory in young children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 34, 59-76.
- Bartlett, J. C., & Santrock, J. W. (1979). Affect-dependent episodic memory in young children. *Child Development*, 50, 513-518.
- Bower, G. H. (1981). Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. (1981). Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology*, 110, 451-473.
- Blaney, P. H. (1986). Affect and memory: A review. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
- Clark, M. S., & Isen, A. M. (1982). Toward understanding the relationship between feeling states and social behavior. In A. H. Hastorf & A. M. Isen (Eds.), *Cognitive social psychology* (pp. 73-108). New York: Elsevier/North-Holland.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social-information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Derry, P. A., & Kuiper, N. A. (1981). Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 286-297.
- Forgas, J. P., & Bower, G. H. (1987). Mood effects on person-perception judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 53-60.
- Forgas, J. P., Bower, G. H., & Kranz, S. E. (1984). The influence of mood on perceptions of social interactions. *Journal of Experimental Social Psychology*, 20, 497-513.
- Forgas, J. P., Burnham, D. K., & Trimboli, C. (1988). Mood, memory, and social judgment in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 697-703.
- Hammen, C., & Zupan, B. (1984). Self-schemas, depression and the processing of personal information in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 37, 598-608.
- 池上知子 (1996). 対人認知の心的機構—ポスト認知モデルへの提言—. 東京: 風間書房.
- 池上知子 (1997). 社会的判断と感情. 海保博之 (編) 「温かい認知」の心理学—認知と感情の融接現象の不思議 (pp. 99-119). 東京: 金子書房.
- 池上知子 (1998). 社会的認知と感情. 山本真理子・外山みどり (編) 社会的認知 (対人行動学研究シリーズ8) (pp. 77-101). 東京: 誠信書房.
- Isen, A. M. (1984). Toward understanding the role of affect in cognition. In R. S. Wyer & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition* (pp. 179-236). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Isen, A. M. (1987). Positive affect, cognitive processes, and social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp. 203-253), Vol. 20, Academic Press.
- 伊藤美加 (2000c). 自己関連の情報処理における気分一致効果—自伝想起課題による検討—. *心理学研究*, 71, 281-288.
- 川瀬隆千 (1996). 感情と記憶. 土田昭司・竹村和久 (編) 感情と行動・認知・生理—感情の社会心理学 (対人行動学研究シリーズ4) (pp. 203-227). 東京: 誠信書房.
- Kuiper, N. A., & Derry, P. A. (1982). Depressed and nondepressed content self-reference in mild depressives. *Journal of Personality*, 50, 67-80.
- Lemerise, E. A., & Arsenio, W. F. (2000). An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. *Child Development*, 71, 107-118.
- Masters, J. C., Barden, R. C., & Ford, M. E. (1979). Affective states, expressive behavior, and learning in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 380-390.
- McFarland, C., & Buehler, R. (1998). The impact of negative affect on autobiographical memory: The role of self-focused attention to moods. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1424-1440.
- 中澤 潤 (2000). 社会的問題解決からの社会性の発達. 塩見邦雄 (編著) *社会性の心理学* (pp. 43-62). 京都: ナカニシヤ出版.
- Nasby, W. (1994). Moderators of mood-congruent encoding: Self-/other-reference and affirmative/nonaffirmative judgement. *Cognition and Emotion*, 8 (3), 259-278.
- Nasby, W. (1996). Moderators of mood-congruent encoding and judgement: Evidence that elated and depressed moods implicate distinct processes. *Cognition and Emotion*, 10 (4), 361-377.
- Nasby, W., & Yando, R. (1982). Selective encoding and retrieval of affectively valent information: Two cognitive consequences of

- children's mood states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1244-1253.
- Parrott, W. G., & Sabini, J. (1990). Mood and memory under natural conditions: evidence for mood incongruent recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 321-336.
- Rusting, C. L. (1998). Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, 124, 165-196.
- 筒井美加 (1997a). 自己関連語における気分一致効果. *心理学研究*, 68, 25-32.
- 筒井美加 (1997b). 自己関連判断と他者関連判断における気分の影響の違い. *日本心理学会第61回大会発表論文集*, 772.
- 富山尚子 (1995). 児童が文を記憶する際のムードの影響. *心理学研究*, 66, 336-344.
- 富山尚子 (1997). 認知過程に及ぼす気分の影響 —気分一致効果と気分不一致効果—. *お茶の水女子大学人間文化研究年報*, 20, 209-216.
- 富山尚子 (1999). 文作成時の気分の影響 —気分一致効果と気分不一致効果—. *心理学研究*, 69, 441-448.
- 富山尚子 (2002). 気分の調整と気分生起時の要因 —イメージ法による検討—. *お茶の水女子大学人間文化論叢*, 5, 1-12.

(2008年1月11日受理)